

小学校通常学級における画像と会話を重視した作文活動の開発

勝井まどか*1・福島耕平*2・下村勉*3

Email: madoka.katsui@gmail.com

*1: 鈴鹿市立合川小学校

*2: 桜花学園大学

*3: 三重大学名誉教授

◎Key Words 作文, 画像, 会話, 会話作文法, 『ロンリー2』

1. はじめに

小学校の作文活動の一つに日常の生活や体験を記述していく活動がある。その際、児童が自分の体験や思いを想起しやすくするため、また文章構成の支援のために、ワークシートの活用が一般的である（以下、「ワークシート作文法」とする）。ワークシートには、文章構成（はじめ・中・おわり）の枠があり、児童は体験や思いを記述する。

しかし、ワークシート作文法では、完成した内容が具体性に欠ける場合も多く、読み手に伝わりにくいものもみられる。これは、児童が体験や思いを一人で想起することには限界があるためではないかと考える。

筆者は外国籍児童を対象に画像と会話を重視した作文活動をおこなった。その結果、児童が画像を指しながら積極的に話す姿や会話の録音データを何度も再生しながら、最後まで意欲的に作文活動に取り組む姿がみられた。

そこで、通常学級の児童にとっても、画像を見ながら会話することが、体験や思いを想起しやすくさせ、作文を書く際に有効な支援になるのではないかと考えた。

本研究は、小学校の通常学級児童を対象として、画像を見ながら仲間と会話をし、会話の録音データを活用して書く学習法が、児童の日常の生活や体験を記述する文章作成活動に有用であるか検証することを目的とする。

2. 開発した学習法

開発した学習法（以下、「会話作文法」とする）の学習手順を以下に示す。

- 1) 作文の題材となる画像をiPadに2~3枚取り込む。
- 2) 聞き手は、聞く相手の画像を見て、質問事項を考える。その際、SWIH等の必ず質問する項目を決めた半構造化インタビューとする。
- 3) 聞き手・話し手は、画像を見ながら会話を5分間おこない、会話は全てICレコーダーに記録する。聞き手は、会話中に聞きたい項目が新たに出た際は、質問をする。
- 4) 各自、録音した会話データを聞きながら、ワークシートに内容を記入する。
- 5) ワークシートをもとに、文章をiPadで記述する。

3. 会話作文法で活用するシステム

会話作文法では、文章作成に、iPadアプリ『ロンリー2』を使用する。『ロンリー2』は、筆者らが共同開発をした画像の活用や段落の入れ替えが自由にできる文章作成支援アプリである²⁾。トップページで、段落数や字数、文章の型等を決定してから文章作成をおこなう(図1)。

また、段落ごとに文章作成枠が提示されているため、文章全体の構成や展開が明確化される。

文字入力には、手書き文字入力ソフトMazec(マゼック)を活用した。Mazecの活用によって、入力が容易になり、文章を考えることに力を置くことにつながる。



図1 『ロンリー』のトップページ

4. 研究方法

4.1 実践時期及び対象児童と実践方法

実践は、2020年6月に国語科の時間5コマ(1コマ45分間)でおこなった。対象児童は公立小学校5年生12人である。5コマ中に、2つの作文課題に取り組みさせた。題材は、「学校が始まって感じたこと」「ステイホーム中、はまっていたこと」である。「学校が始まって感じたこと」は、ワークシート作文法で2コマ、「ステイホーム中、はまっていたこと」は、会話作文法で3コマおこなった。

学級を3人組4グループに編制し、グループ内で聞き手・話し手・記録者を分担した。今回実践をおこなった国語科の単元では、単元目標に「聞きながら要点を記録することができる」ことも含まれていたため、あえて記録者を設定した。この記録者は会話には参加していない。

4.2 検証方法

条件を揃えるために、ワークシート作文法についても、作文の仕上げには『ロンリー2』を活用した。また、『ロンリー2』は、編集画面に画像を取り込むことができるが、今回の実践では条件を揃えるために、会話作文法についても、画像を取り込まずに書かせた。

ワークシート作文法と会話作文法によるそれぞれの作文について、文字数の変化や、内容の具体性と了解性について差異を検証した。また、全ての実践後に、児童に2つの作文を読んだの振り返りをさせ、質問紙と自由記述による意識調査をおこなった。

5. 結果

5.1 文字数

作文法の違いによる文字数を表1に示す。作文法の違いによる文字数の変化について、対応のあるt検定をおこなったところ、ワークシートの文字数では、有意な差はみられなかったが、完成した作文では有意な差がみられ、会話作文法の文字数の方が多かった ($t(11)=0.76, p=.465, t(11)=-4.00, p=.002$)。

表1 作文法の違いによる文字数

	ワークシート 作文法		会話作文法		P値
	Mean	SD	Mean	SD	
ワークシートの文字数	165	42	152	46	0.465
完成した作文の文字数	203	43	362	141	0.002

n=12

5.2 具体性と了解性

小学校教員4名がワークシート作文法と会話作文法で書かれた作文(合計24編)を、具体性(具体的記述があるか)と了解性(伝わる文になっているか)について3段階で個別に評価をおこなった(表2)。対応のあるt検定をおこなったところ、具体性と了解性のそれぞれ1%水準と5%水準で有意な差がみられ、どちらも会話作文法が高かった ($t(11)=-4.46, p<.001, t(11)=-3.08, p=.010$)。

表2 作文の具体性と了解性の平均値

	ワークシート 作文法		会話作文法		P値
	Mean	SD	Mean	SD	
具体性	8.8	1.6	10.5	1.6	0.000
了解性	8.3	2.1	9.6	1.9	0.010

4名3段階:合計12点満点

5.3 質問紙

質問紙の項目を表3に、結果を表4と図2に示す。Q1・Q4は「ワークシート作文法」と「会話作文法」の2択、Q2・Q3は「はい・ややはい・ややいいえ・いいえ」の4件法で回答を求めた。

表3 質問紙の項目

Q1	完成した2つの作文を読み比べて、自分の伝えなかったことが書けているのは、「ワークシート作文法」と「会話作文法」のどちらですか
Q2	会話の際に、画像があると話しやすかったですか
Q3	会話の際に、画像があると聞きやすかったですか
Q4	「ワークシート作文法」と「会話作文法」では、どちらが作文を書きやすかったですか

表4 Q1とQ4の児童の意識

	ワークシート作文法	会話作文法
Q1	0	12
Q4	1	11

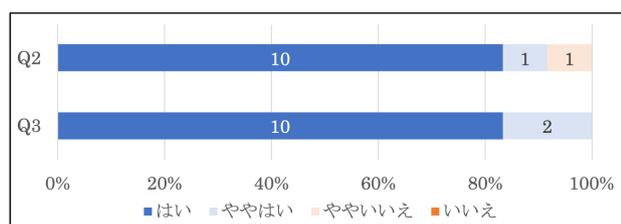


図2 Q2とQ3の児童の意識

5.4 自由記述

Q4については、理由を自由記述で求めた。その結果、「会話作文法」に回答した児童11人の理由は、「相手に話しをすると書きやすい」等の会話についての記述が7人、「思いつかなかったことを聞かれて書きやすくなった」等の質問についての記述が4人あった。

6. 考察

教員による評価において、会話作文法による作文は、具体性・了解性ともに有意に高い点数であった。また、質問紙Q1の結果、会話作文法の方が、伝えたいことを書けたと全児童から回答が得られた。さらにQ4に関する自由記述には、「相手に話しをすると書きやすい」「思いつかなかったことを聞かれて書きやすくなった」等の会話や質問の有効性の記述がみられた。

これらの結果から、会話作文法が一人では想起できなかったことを思い出したり、具体的な事柄まで意識できたりすることに効果を発揮した可能性が高い。

会話作文法では、ワークシートの文字数がワークシート作文法より若干少ないが、これは会話作文法では、児童がワークシートへの記述をメモがわりにしていたのではないかと考えられる。しかし、会話によって具体的に書きたいことが生じた結果、完成した作文では、会話作文法の方が、ワークシート作文法よりも有意に多いという結果につながった可能性がある。

Q2・Q3の結果から、画像が話し手や聞き手にとって、役立ったことがわかる。児童にとって、インタビュー形式の会話を5分間おこなうことは、容易なことではない。そのために、聞き手があらかじめ画像を見ることは、質問項目を考える際に有効である。また、会話中、画像を指しながら質問したり、答えたりする姿もみられたことから、画像が会話を促すツールとして有効であった。

これらのことから、開発した画像と会話を重視した会話作文法は、児童が伝えたい内容を具体的に書き表すために有効であることが推測される。

7. まとめ

児童間でのインタビューは、聞き手の会話スキルや質問内容によって、会話の広がりには差が生じると考える。今後は、聞き手のどのような質問内容がより具体性のある作文につながるのか実践を通して検証したい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費奨励研究(課題番号20H00879)の助成を受けておこなわれた。

実践及び作文の評価にご協力いただいた実践校の児童・教員の皆様はこの場を借りて深く感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 勝井まどか, 福島耕平, 下村勉: “外国籍児童を対象とした画像と会話を重視した作文学習”, CIEC PC Conference 2019, 論文集, pp.41-42 (2019).
- (2) 福島耕平, 勝井まどか, 松野秀治, 下村勉: “児童の「書く」ことの苦手意識の軽減と論理的な文章力育成をめざしたアプリ開発”, コンピュータ&エデュケーション44, pp.67-72(2018).